以上大體重な論文を選擇して梗概を述べたが、その他次の題名によつてもうかゞへる如き簡單な報告或ひは平凡な諸篇をのせてゐる。即ち馬衡「故宮博物院參加美展會之書畫」、蔣吟秋「書畫與裝潢」、袁同禮「全國美術展覽會陳列之版畫書」、蔣復璁「教育部第二次全國美術展覽會的圖書」、唐蘭「中國古代美術與銅器」、黃文弼「羅布淖爾發現漢漆杯考略」、袁同禮「我國藝術品流落歐美之情況」、胡厚宣「中央研究院殷墟出土展品參觀記」である。

かくて以上の二十篇を收めた本書は、支那藝術に關する今日に於ける支那諸學者の論叢である。本書を通讀する時、本書の中心部分をなすと思はれる書畫の問題が、同時に支那藝術の基本問題であることを知るは勿論である。そこに支那藝術の特殊性がうかゞへる。西洋の美の概念とは別個の立場に於いて、支那の藝術が把握されるべきである。然しこのことは直ちに全的に傳統を肯定する見解を意味しない。傳統に對する全的な肯定は一般支那學者の缺點であり、ひいては純粹學問の進歩を阻む大きな障害である。徒らなる傳統に對する保守さりとてもしくは飛躍的な反抗を排して、先づ批判的であることが必要である。かゝる立場に立つ新たなる支那藝術學の確立は、こゝに東洋世界の美の概念を把握せしめるものである。されど本書によつて示された諸論文に於ける方法論の不統一と混亂は、その日の來るやはるかに遠きを思はせる。

〔澄田正一〕

赤峰紅山後

滿洲國熱河省赤峰紅山後先史遺跡

—東方考古學叢刊甲種第六冊—

昭和十三年九月刊。四六四倍版一三一頁。圖版四十七葉。附英文摘要。定價弐拾圓

昭和十年度の京都帝國大學夏季講演會で、故濱田博士は赤峰の旅に關する講演をされた。當時博士は約一ケ月のこの發掘の爲に日燒した元氣な姿で幻燈十六ミリ等を用ひ、發掘といふ一見無味乾燥な事項に對し興味の話題を逸する事なく、聽衆者をして等しく大陸の先史文化への憧憬の念を起さしめられたのである。それから滿三年右の調査報告が堂々たる裝ひを以て東方考古學叢刊第六冊として世にまみゆる事となつた。而

も其の期に先立ち濱田博士は逝去されたのである。「本會は此書を以て博士の功績を仰慕する一記念碑とし、博士の遺圖を繼承して益々東亞考古學の振興に邁進することを期するものである。」なる序言を見出すのは吾人の痛恨事であり悲しみの念切なるものがある。

赤峰は滿洲國熱河省の略々中央に位する小都會であつて、紅山（Hung-Shan）とは赤峰盆地の中央に屹立した赤肌の露出する花崗岩の低い山をいふのである。此の地に先史時代遺物の存することは早く鳥居博士の注意せられた所で以後リサン師、シヤルダン師、梁恩永氏等に依つて調査が行はれ更に近く我が上治、八幡兩氏等もこれに調査の手を染められたのである。東亞考古學會の發掘は右の先人の調査に導かれたもので、從つて其の重要性が考慮されてゐたのである。本一行は調査主任たる濱田耕作博士以下、島村孝三郎氏、水野清一氏、赤堀英三博士、島田貞彦氏、三宅宗悅博士三上次男氏等の人々であつて、昭和十年六月九日赤峰に到着後同月廿九日に至る廿日間に亘つて發掘調査を行うたのである。調査地域は紅山北部の所謂紅山後附近を中心とした部分で、更に詳しく云ふと、主として第一峰南側の鞍部附近に於ける墓地、次に同附近並びに第二峰の東側臺地にて土器、石器類を出土した第一住居趾。更に第二峰東側臺地に於ける彩文土器片その他を出す所の第二住居趾等である。本書は是等を通じた調査の結果を濱田博士、水野學士が綜合整理したものに他ならない。

さて本文は章を分つ事七。別に附錄として墓地（石槨墓であるが）發見の人骨に關する三宅、吉見、難波三氏の研究の成果をはじめ、出土鳥獸骨に關する早稻田大學の直良信夫氏の文、土器の技術的實驗考察に就いての磯松技師の報告等を錄して其の完璧を期してゐる。いま本文から內容を瞥見するに上記の墓地で見出された總計二十六基の石槨にあつては、中に大部分仰臥（或は左臥、右臥もある）伸展の人骨に土器一箇、利器一、二種、裝身具一、二種を副葬して埋葬された狀況が記されてゐる。この利器には骨鏃、又裝身具には靑銅釧類や玉類を伴つてゐた事、土器は壺形が大部分で、鬲も存したが赤褐色磨研の類がその殆んどを占むる事等特筆さるべきである。この試掘面積は僅かに六百坪であり、中に盜掘されたものを見るが、これ等から推

して著者は少くもこの赤峰後山には三百基の墓が存するだらうとしてゐる。次ぎに第一住地では同じく赤褐色磨研土器を基本土器として多く發掘したのであり、調査者は之を以てさきの石槨墓人骨の住居地の趾としたのである。詳しくは此處からは更に赤褐色繩席文土器、黝色繩席文土器(灰陶)その他の土器を僅かの石製品及び玉類更に牛、豕、鹿、馬の獸骨類と共に發見した。灰陶とは漢式土器の特色であり赤褐色繩席文土器はこの土器の赤色磨研土器への作用の結果と筆者はしてゐる。更に著者は此地蒐集の青銅器類の考察から、これら右の文化人を綏遠文化に少なからざる聯關を持たさしめんとしたのである。次ぎに第二住居趾(具體的には一般黄砂土層の上に存する遺物包含層を意味する)では土器として、前述の赤色良質の彩文土器の他に黑褐色土器を見、石器には多くの種類、即ち大形槌石、石斧、小形打石器(細石器)、石庖丁、砥石、石皿等を發見、又骨牙器、稀に貝輪をも伴出したのである。著者は之等遺物から、第一住居趾が示す文化とは年代的に差がある事、即ち生活樣式その他から第二住居趾は新石器文化階段にある紅山後第一次の文化、第一住居趾は青銅器文化階段にある第二次文化としてゐる。第五の考察の章ではこの赤峰第一次文化、換言せば彩陶文化を解說し從來東亞發見の一般彩陶との比較を行つてゐる。又著者は黑褐色粗質土器の系統を北方の櫛目文系土器に求めたのである。かくて一先づこれが示す生活樣式に立ち到り、全體的概念論ではなく、獸骨が示す事實から家畜飼養その他を推定し、鳥骨、細石器等から狩獵生活の斷片に一言し、又一般遺物から穀物の栽培者、農耕生活者なるを結論し、更に實年代を河南安陽の文化、彩陶文化等の聯關の下に紀元前第二千年代初半に之を推定したのである。第六章では赤峰第二次文化即ち赤色磨研土器即ち紅陶の文化に到り、前章で行つたと同じ筆法で、就中石槨墓の系統をシベリヤ、東露即ちミヌシンスク、アナニノ方面の類似古墓に求めようとした。かくて彼等の生業をこの綏遠青銅器文化に浴してゐた事から牧人と解するのである。又年代は之を秦武漢式文化に併行すべきものとした。著者は更に先秦時代文獻に見ゆる東胡或は山戎なる民族の、この地域での居住を、この第二次文化に聯關させようとするのである。

以上の如くである。この兩文化遺跡の性格を區別さして考へ、斯樣に、まとめあげ、更に實年代を、はつきり考定されんとした意企は、主として著者の一人水野學士の考察のやり方である事が自ら理解されてくるのである。調査報告の類とはいひ乍ら、我々一般讀者から見ても本書の中には將來の東亞先史文化の考察に樣々な教示をあたへて呉れる箇所が少くない。考古學的遺物に見る牧民の生活の必然性、或は積極的年代の不明な北方系櫛目文土器の下限の問題等、又本書に呈示されたる諸遺物の美事な圖葉附きの說明、或は著者獨自の考察には將來に殘された樣々の問題を藏してゐる樣に思へるのである。とまれ東亞考古學に於ける文化の性格の旣に「滿蒙新石器時代要論」或は江上氏との共著「內蒙古長城地帶」等で概觀された著者の一人水野學士が、更にこの赤峰にて、實際に則した成果をあげられた事は慶賀の至りである。讀者は暑い夏休に一片の土器をも捨つる事なく整理されてゐた水野氏の姿と本書の出版に敬意を表さねばならない。思へば昭和二年の貌子窩の大發掘以來、こゝに甲種第六冊目の報告を世に出した東亞考古學會の學界に於ける功績も亦今や世界的になつたと稱さねばならないであらう。

〔藤岡謙二郎〕

張家口通信

今張家口にも「日軍廣東入城」のアドバルーンが碧空高く揚つてゐます。實は小生一週間前から蒙疆地區をあちこちしてゐます。十六日北京を發つて十七日早朝大同着、雲岡に行き、十八日朝飛行機に乘せて貰つて（生れてはじめての經驗です）包頭へ、機上から黃河も眺めました。言語に絕する壯快さでした。その日は包頭泊り、翌十九日は厚和のラマ寺を一巡して同處で泊り、二十日厚和發、大同を素通りして張家口へ、翌日張家口外元寶山麓へ、この邊の長城や蒙古人の市を開く所などを見て又西郊の賜兒山へ上る。今日は再び城內の各所を見て廻りました。明日はこゝを發つても一度大同へ歸ります。葉書には書き切れぬ色々の話がある。云々。森鹿三

（十月二十三日發、日比野宛）